

10月31日のハロウィンと 江戸時代の桜花見の共通点

欧州で始まったハロウィンは秋の、日本における江戸時代の桜の花見は春の、双方とも季節のイベントとして若者が仮装をし、このときだけ、我を忘れて飲食を共に、ばか騒ぎが出来る場所なのが共通点といえます。

江戸時代、花見の特色は顔にお面をつける人が多くいたことです。春の花見の時期になると必ずお面売りの屋台があちこちに出現していました。花見客は自分の好きなお面を買い、顔につけると誰だかわからぬ姿になります。人々はお面をつけ、ひと時、自分を忘れ飲食・会話を楽しみ、ばか騒ぎをしていたのです。

ハロウィンの場合、この時期に限って普段できない魔女やお化けの仮装や顔への特殊メイクが許されます。人間は仮装をすると自分が誰だかわからなくなり、気分が一新し、テンションが上がるみたいです。

毎年10月の終わりになるとディズニーランドや店の装飾がハロウィン一色になる。

カボチャのランタンや悪魔っぽい仮装など・・・でもこれって何だろう？

日本では、ディズニーランドがハロウィンを持ち込み、そこから徐々に日本社会に広がっていきました。

ハロウィンは毎年10月31日に行われる、古代ヨーロッパのケルト人が起源と考えられている祭りのことで、もともとは秋の収穫を祝い、悪霊などを追い出す宗教的な意味合いのある行事だった。

しかし現代では特にアメリカで民間行事として定着し、祝祭本来の宗教的な意味合いはほとんどなくなっている。

ジャック・オー・ランタン(Jack-o'-lantern)は、「お化けカボチャ」「カボチャちょうちん」とも言えるもので、オレンジ色のカボチャをくりぬき、ナイフで目、鼻、口をつけ、内側に火のついた蠟燭を立てるもので、最もハロウィンらしいシンボルである。

ケルト人の1年の終りは10月31日、この夜は夏の終わりを意味し、冬の始まりでもあり、死者の霊が家族を訪ねてくると信じられていた。

しかし時期を同じくして出てくる有害な精霊や魔女から身を守るため、カボチャを刻んで怖い顔や滑稽な顔を作り、悪い霊を怖がらせて追い払うためにハロウィンの晩、家の戸口の上り段に置くという習慣となった。

先祖を敬ってお祝いする、日本のお盆と似た風習ですね。

魔女やお化けに仮装した子供たちが近くの家を1軒ずつ訪ねては「お菓子をくれないと悪戯するよ」「いたずらか、お菓子か」と唱える。大人の側は、あらかじめ鍋やボウルなどに大量にお菓子を用意しておいて、やってきた子供たちにそれを与える。

これは「はいはい悪霊さん、お菓子あげるから悪戯しないでね」という微笑ましい儀式でもある。

お菓子がもらえなかった場合は報復の悪戯をしてもよいとされる。

また、若者にはハロウィンの仮装が人気になっている。ハロウィンで仮装されるものには、「恐ろしい」と思われているものが選ばれる傾向があり、たとえば幽霊、魔女、コウモリ、悪魔、黒猫、ドラキュラや狼男、フランケンシュタインなど「悪霊っぽいもの」が題材として用いられる。コスプレもそうですが仮装すると気分まで一新して行動が大胆になるみたいです。

この秋の風物詩ともいえるハロウィン、遊園地やデパート、スーパー、パブや居酒屋に至るまで、その雰囲気を出し、経済活性に大きく寄与しています。しかしもともとの「先祖を安全に迎え入れる」という意味も理解し、楽しいイベントがもっと増えるといいと願う次第です。

西洋のハロウィンは宗教行事ではじまりましたが、現在は10月の季節行事として定着してきました。江戸の桜花見は春の季節を知らせる国民的行事で、この習慣は現在まで引き継がれています。

現在の桜花見でお面かぶりを目にすることはありませんが、江戸時代の桜花見では、色々な種類のお面が屋台で売られており、大好評でした。人々は一日、お面をつけ、日常の自分から解放され、憂さを晴らしたいと考える人が多数いたのです。

現在、若者に流行ってきたハロウィンの仮装は恐ろしいと思われるものが選ばれます。

幽霊、悪魔、ドラキュラ、フランケンシュタインなどの仮装を普段すると、馬鹿者呼ばわりをされますが、ハロウィンの時期はこれらの仮装が許され、奇抜な服装、特殊な顔のメイクが堂々とまかり通るのです。

これらの仮装をすると、本人が誰なのかが全く分からなくなってしまいます。仮装した本人はその日は、自分を忘れ、のびのびと行動が出来るので、楽しいのでしょうか・・・